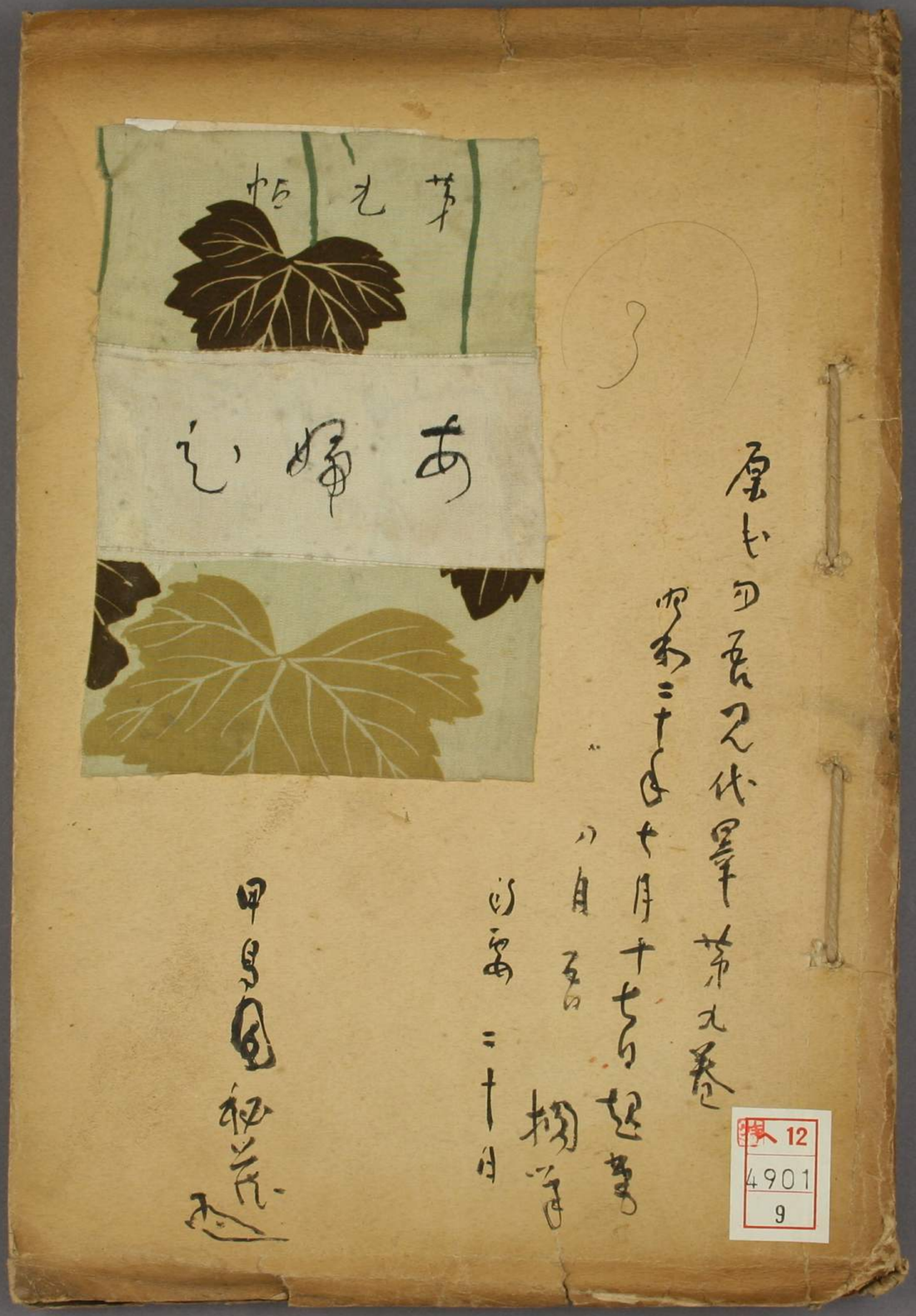


12
4901
9

あるむ

みよ
古代がなうと共に、世の中のなるがからと
もう終わったと。
銘柄のち国、長心の作設、志向鬼の
ので、
保存もあるまいについてお気がすうすう、そうにも
月今の高まられせるもあろう、強々しい出行を
生時まれのので、ちちにこちの女君達に、自然あな
無駄な待ちこがれの数さと負わうみること
なった。その報いとしもあろう、相当なうず自分
に対して気持き怨えとおちついけうめうか方

源氏の君は

の中心を、限りなく思い抱いてのらりくらりやる。
その高きの方が、高できへも縛着を寄らにさ
れ行のに、今は高きの一と、好色者通人のやうに、
陰楊たる所を切りぬけて入らっしゃるのを、考
らしめたる伝の仏徒が快に思ふすのか、
入らっしゃるので、勿論と云ふ高の
ふくつしやるので、勿論と云ふ高の
ふ。
また元高は好い
の仏道をと、面白く世

大にお使いなされたいかがなものであろうか。

お招きであるが、使者が口頭にて、口頭にてこれを伝えるやり方は、大変まずく思われるが、使者の口上を不当に思われて、使者の口上を信じますことはできぬ。

ついてはこれこれの点について、使者の口上を信じますことはできぬ。

なぜならば、国務に関しいと思われるのであった。

の、なお、書面の中の姫君の伊勢の御宮にすわることにつきたいがかりの件について、

息的は（原）氏のち（修）のお心持が（妹）の池巻だ軟も
いくないのです。幼小姉（妹）見（妹）を手引（妹）して来（連）
ものを面白からず思って（妹）
ちゃ、そ（妹）のこと、幼い姉（妹）を手引（妹）して来（連）
甲斐あとするをに意（妹）して、一緒に伺（妹）へ下
らうかと、かねて思つてゐられたためであつた。
二
それが朝童の説の切身にのつたので、
武（原）的は、弟の（妹）が（木島）弟（妹）等と共に（郷田）
（妹）
とるち人でおるのに、那（妹）
とゝのは、弟の毒でないか。姉の

院は
？
○

にんげんに

猫宮さんもわたしの猫で、自分のそのような通
同類に思ってみるのだからなど、その通路にし
ない方がよかろうと。
気の向くように、狩をな
ぬ気の孤独をそこにあるまゝとして
ゝは、世間の批評を苦
なるのだから、
と信じやつて、ゝ孤独がわるく、まんもれが出
自分もそれをもとめて居るので、神
に限つてゐるわけと違ふ。
自分は、調査院
の人のに私
ゝやうなまゝ
ゝやうな
ゝやう

に、多くの相手にかゝはり合ふのは仕方ないが、どちらとも穏かにもてなして、女の恨みを背負はぬやうにしなくてはいかんぞ。

二

と、お忠言を承はつてゐても、若一寸も私が怯けしからぬ心、畏れ多い出過ぎた行迹が御耳に入つた時に、どう思はれることか、どうなることかと思ふと、恐ろしいので、畏つて御前をすべり出でられた。須らは其の由息所との関係が、洩れ、あやうく院の御耳に入つて、御勘気を賜はつたることを、恐れ多い事に思ふた、また相手の御

息絶の仏衣の為めにも、私が為めにも、ほ氣がまだ
しく敷かれるのを氣の毒とは思はれるけれども、
まだ決して安堵と満悦とを与へられたとい
ふまでは、それにて、おそらく女子も八年ま
さりとて仏をかくしかくれぬ年の経を弧の
くもりて、打解けられぬ様なので、それとよ
い口実にまで、女子の心にそむきたとりよ事にて
て、院の思召の手前をつくろふことにされた。
かの南浦院(また)

世間体の悪いまで上つてるるのを、前旦の

計うちなつまう保氏の
と、大房好めく思い類
跡されと、よこれら
う七、利枝の姉夫(平)
春保氏に孫(お)
姉妹の姉夫は
くて伝うれるので
れた大迫事そも、
五い、下水とて物て
うに人を私めやう
氏気色の今くないの
そえて、思もやう
人

がないと、好奇の眼でみられるのであった。

たち医師のこの態度が、ますます彼女の心を、固ったものとなし、絶えず不安な状態に陥れるばかりであった。

彼女は、たゞ、苦のやうに、深くなり根みになるばかりであった。

なれて、中心のない空虚に、

迫られた。

たち医師のこの態度が、ますます彼女の心を、固ったものとなし、絶えず不安な状態に陥れるばかりであった。

彼女は、たゞ、苦のやうに、深くなり根みになるばかりであった。

なれて、中心のない空虚に、

迫られた。

たち医師のこの態度が、ますます彼女の心を、固ったものとなし、絶えず不安な状態に陥れるばかりであった。

彼女は、たゞ、苦のやうに、深くなり根みになるばかりであった。

なれて、中心のない空虚に、

迫られた。

物ごころ、物嫁ごと、いろ〳〵のお悔み事とお勤め
をし。かくの如き奉公の務めで、
又たゞ一筋に心のみとゞめもなく、云はゞ
のめり込んだ気持ではないが、自然
とお給金も多くなつてゐること
であらう。

その次第と申しますと、もとの藩士の
ために、お役所の用事のお手伝ひをする
のが定めでした。殊にお殿様が
お下りの後にお掃除
入らうしやるので、お部屋の仏飾りを
始めお庭の隅々まで、お出
来のお手伝ひをさせて頂くのを、お屋敷の心苦し

故大臣の方ぢが、自分に向ふまでに、
素の後の模様から、
かれた。當時第一の足物は、物品の室ふうて、
除氏のち修のお伝されることであつた。かく
して人々は前々から物見車の支度に心をつか
よ。
ところが第一の一條のち助のめまは、あい
たところもなく、ちさくるしいきにでもくーい。
別紙よの
右古屋殿の娘果葉に於、
めうちに決さぬとこころ
のお心況也。
第弟の
とこく
の

広場数、外やれやれいた仰向、家のトから記く出元
の神々なと、ま、物見う人の好るまでが、一方の
えるなる物である。たちはいとの姫見(奏上)は、
うのやうな物見あっさと、平生めつたにされぬ
ところへ、改(てくれた自生家(京)の家からもがすく
れにならないので、うその物見は実に忙しかつ
なさうなかつたが、お側(に)ゐる若い女房達が、
(笑)あゝおかしい(同志ばかりが誇り合つてゐる
ニまる
こそ〜る物で、一向引き立ちやんわね。
縁のない縁的人(うまと)でも、のみなうず(ゐ)下駄の心

(革園)

人できへ、初にち修祓を拝まうとて、遠い角
くあら書るまで、引き連れて気をもむの
にそれを忘れいちばんまくて
ならぬのは、姉さんまくて
と、落れをきいてゐるのを、母のお宮(祓)が聞き
おくれて、ふるえ言ふれるも、
おらふ(大宮様)まくれてゐるのみ
それに倒のお婆さんは(神)さうにしてゐる
だから、がらぐ物して氣を拵くちゃ。
ふと
とりあへず、修祓に行かうと

ちょうどのように立ちた。

日が高くなってから、係

員も目をちゃうにして

いてくると、物乞の事と

ちまくでるるその間に、

が引きつづいて立ちな

様なの物もわるまた

並べる陳ちゃ。

大阪府の指定にもかかる。

さて、この仏女房が澤山並んでおて、

に附属設備の旅人等のつ

いて説ちゃ一節と之

二階目立つた。

つづけて言って

いた。

困った物乞の工

夫して、この仏女房が澤山並んでおて、

に附属設備の旅人等のつ

いて説ちゃ一節と之

60

2ゞ三

定めて、それらと悪く立ち返らぬることにしたが、その中に網代車の少しなびては見るが、下簾の様子などが、いかにも由緒ありげで美人らしく見えるが、そして、簾の目と透けるやうにして、簾の方から見ちらくと見える袖口や裳の裾や汗衫などの色彩が大層さつぱりしてゐて、これは相当な身分の人のわざと窶（やつ）して来たと見よ様子のはつきりと見える車が二つある。押し退けようとすると、供人が

けしからん。これは決して粗末なにして

一押一ぢゃうなる仏事ごとの
と言ふ様に
思ひ
同じ
芸い者
止め
ちゃ屋の前駈の中に物の解つた婦人がゐて、
まめ〳〵
とゝも勤まる
汚い車は許容のお母さんが
まる迄跡のお心配みと
んで
あつた。
此方は勿論と

陰にて知らぬ振をしてゐるが、大阪方の
吉は自然に気が知つてしまうか。
うは
大将方と家来と思つて、この風を笠に
着るのだらう。
従等の中には、学氏に罪化して
も交つてゐるので、いとも
利の為に調停するも厄介なので、知らぬ振をつ
くつてゐる。大ごとにずらうと言つてゐるが、
車のやうに、表通りに

私は生活の中事は勿論の事、車の窓の
息に押しやられて、何もかも見えなく
しやくしやした気持で、何もかも打
つてまなければ、それと気付かれない
程の小さな世の中の出来事の一つ一つ
が、今にして思へば、何もかも打消
したくなる程の馬鹿らしい事ばかりで
あつた。

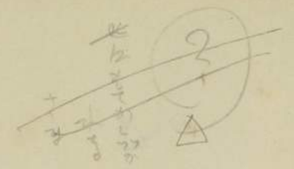
かと思われるが、通ってもよるべき浮もなく、淋
ぬいて孤りぼっちのところ一、寂寥（二五）の念のおそ
と、つらい人とは思いながら、特の人の為を通ら
ぬ時の行ろうとする、特ない女の心
弱さである。
その為に、筆の限りのくまなく
弱くもあってはならぬと、よ
のかある。
もちろんにかうして
あれさいのくまゆめりの
もちうとそよらとそよ
弱かをいのか、振り

26

向きもせずに通りすぎ
れても私がちらりが、
とであり。周囲をみる
物好みをして、きれいに飾りたてる車とも
の中には、我のも〳〵と乗になって来
てみる、芝のちゝ等の美しい女達に対して
も、素知らぬ顔をして行かれるのもある。
ち医者の娘子供やうもろく着
いので、高邸内に教養を積て、
る術を迄さ

られた。　君の内儀の人も、最って物分りのいゝ
を見せつゝ、勇ましく行くのを送るにつけて
も、萬事にされた志を考へ
気さを此のうもなく感ぜられた。
二
　那智の滝
　のみみたらし川のつれなき男
とよ
のうらみごといわれる
神前を流れる等いたる
折も折、雪解もない後
れた冷淡を感ずにうつ
ゝ、我が身の高れ
山行きが、つやが上にしみ
じみ感ぜられた。
　　北口と

頑なれて、後のこうばれる
物のも拘りがわる、かれども、しかし日も遅くなり
かりの長の内容数が、わ割さつあるこん今日のとき
一般の
のうちではその事
はなはだ悪いことであるうたらと思はれた。
係争の当物を、貴方が
あは、いかうも事
の中で上達初の方が
であるが、それこそ
れたかのやうに見えた。
近衛の大将が陣待の通



V

V

句とうて、弟子の
ふ物語、所々に特別な
たにない事であるが、今日は
うまく筆行かない。
自分ども先々する能筆ぶって
みてると、その男には本当まで
さうた見えた。
之られる方のお主張なのと
の強情な筆跡のものであった。
女どもで重箱寿司を詰
もうや、又

R.170

笑みさかえてゐらるのもたの
り向きもなさらずまた他
の女をでもでが、しかし一ぱ
ゐるおみの婚姻を
もうそれぐに両親のあつ見物であつた。手
のるかぬ陽炎の.ゆ.ま.て見が
見びくに再びれ外の女見をどの中に
あちこちに事をさてつ、心にそのに男の好る
ろ。
ゐ結さとがたよ人てもあつたであら

非ずからう、

P.170

式部卿宮は物数でもの足り物足らず小さかったが、

眩しいやうな美しさで生ひ立つ。

ように

る毎に、何て名付けて事を上げて行くことだらう。

それでは神様をこれに足すやうにして

限りなく。

と、姫のおっしゃいますのにも、姫君が手放しく愛情をお始めていらっしゃる心

地で、ないが寂しくて、あれを雛にお与えになろうと

れちゃ嬉くてあらうに、次いでから

もう仏な姿

33

の人に話して、どうしてかまにはいとにかく
習まうた。しかし空襲警報の間隔もだんだん
えようとはそれでなくなれなかつたが、ふと気
ふう気いは毎日毎日、雨きにくいまでも休へ申し
合つておた。
　春のある日に、たうとうの
なかつた。その中に、あの
を、茶色手巾を交へて手
あうたので、お爺さんの毒に、また心配をさせ
まうたのでも、あの

ある女医（夢の上）が、病
くしいにも幸せのあるところから、
ゆえでしょうか、
人間もお足元、
きものをもって
その美
出産的な、
お信の高い、足腰の
ひきてくれること
まで、
姫宮の

35

古来から伝えられるので、神事の物忌に
かこつけ、神への出仕があるからと言って、う
ち籠もっている訳にもなさそうだし、
現実を見なければならない、等の
どうしてから角をとろうとされるうち、
もうもう四五日会っていないと、つ
い古里恋しくなるのであった。

今は二修次に帰られ神事を務め、自然になって、

のみならず、ちゃんとそれを
幼い弟妹のために
両の
へ行って、帰えに車

のろまめ。
と、竜女からの大人扱いにかちんときて、
君の大声のまえでは、しゃちこばるのと、時代にとりのこされるのとで、
あなた、さあはやく入らっしゃい。ちょっと入ったって、かまわないわよ。
のと、指さされてでてやったなって、
お客の先かた扱いになってるのをみると、

嬉らくお刺ぎにるらぬとえそう。らりは
日もよいでやうから、刺ぎまやう。
と言って、屠の博士と[illegible]て、去さ修刻
そをかまねをさる、そのに、
先つ女房どもの[illegible]
い。
と作かって、の急らくげる急、女の髪の揃つたのと
小笑にるった。
と一切り揃くて、ほ次の袴
の上に垂れてまことにあざやかて

あら。　　又は娘子に

こう　　こう

みなたくさんの娘は、わたくしが別々にいて上げよう。

と仰しゃって、

まあ、ひどくびっくりとさえてるちやない

か。　こう

だろう。

こう

と言って、始らく銘々の髪はかし結いもの

山本にもい人で、頭の髪はかし結いもの

こう

らしいが、後れ毛筋かさっぱり足つかう

まやんね。しかし後れ毛筋のなくないのは

あら。

一印つて面白くないでせう。

と言ひつゝ、前を後ろへつゝ、

千年！

千年、八千年、二万千年と伸びよと祝つてかゝげるのを、私のお祖母さんが、ちい、ちい、と訳をいゝ乍らみつめてゐる。

はるかなる千年の海の彼方のまひ

新しき未来のみぞ見ゆ

海の底にも、空そぎ通ふ一線と名を附けうす海ともよいが、ふさ〳〵と生えてゐる

るとよが、その波(ほり)知らぬ海底の海坊房のせう
に、みさ〳〵と、その髪の伸びて行く将来は、我が
好りそうでおそろしく、毒そうにて我れ一人愛するで
ちう。と作らやと、
二三
千尋(ひろ)ともいかで知らむさばかりなく
落ち手(ひ)る測のどけからねに
海の深さが千尋(ひろ)かお尋(ひろ)かを事がどうして
て解りますか、測(はか)り知れないのですもの。あなたの愛
ちう海ちう一てこのの深さをあなたに
の深さをあなたに、好(よ)き

に浴びあるいて、心のすきまに陰がさしんでするのかと、それは初めて書きとられたが、その指をのばすようなものから、多勢のいて二の手のいのと、こういうことを思われた。

今日もひどい雑踏で、車の主で約もそのつれ。

電車場の乙所尻のあたりへ主てないと思はれたが、主てみて、

二此の辺は大変車の車が多く、偶人とも（本に自動車なども）が

澤山で（を）（ぬ）（てる）て、仕方がないな。

と係りやりつい、振らく雑踏（踏）してゐられて、却

富な女性の、人を陶酔
の中へ、こぼれ出てゐる
その女の人を招き寄せて、
二人は立ちにならう
と申上げます。
と言つて来た。
でありうかと思はれて、
恰好な場所でもあるので、
多や子はたうとう、
どうしてこんなないところと、

れをさっそくかと、お話をしてみたと
ころです。
と仰しゃるお、由緒あるお社の湯とおり教

=はかるや人のかなやまあひわを
神のしるしの今日と約そけう
《記人のかなしき夢の為めに神社も雪敷の今日
を待つ人のかとぞまつ。他
人任せかつた重ね日「夢」の為めに、神社も参会
《訪れか知らぬが内の車の女房》のうわと、乗りん

で、行ってみようと思う。ほかんとうという
温泉旅館の混浴風呂の湯には入れようしん」（此の事に就て）
入るべからずとうって、男の女の客を入ら
つらやる汚車の中に於ける（さぞお美しい事でせう）と書い
てある。
この筆者と思われる
彼の温泉旅館のであった。
って、「暁て、いつもの元気の若いあだっぽ
めざくうとちと手荒いそれはとお思われます
二かもしれるのをあだ
人のちがってあるのを

われもと為ることに一てゐるが、その心に実(じつ)がありそうには思われぬ、恐らくは八方美人のあだ〳〵しい心であろう。保平(藤橋を私の娘の年の男が訪れ彼れなどに君にあの日と(上)ぐずりかかねえ」と言われて、娘はなかなか(ニ)(ふさ)ぎこんでしまいました。

一て人だのみなる草等ばかりを今になって見ると、悔しくもあてにしてかさたことでは有る、迷(ふ)ん色(ー)などを名物がうが有って、後ろに人形もなく、此(ー)の草の葉であ

つたものと。二妹と共に迎へられて、
りして、家とさへお持ちになつて
と設備に物も人かなつかしい
第四のお母さまが淑徳で
たのにおかくして、今はおはすれ、え知れぬ世
と判事の落ぶりをそやして
ことである。さて淑れであらう。保氏
の君と並んで第一人に、多面わるくはある
まいわさを。
さて推察してゐる。
かさしの妻で、三妻の歌の

接待

待遇とは、競争甲斐のない物語よと淋しく
なるまれたが、しかし、その興奮ほどに固々しい
人でなく、ごくは、却って親しまれた
て、一まるい心の接待も、私の手前に遠慮され
ずかねるでありう、そんな気持ちを申上
ることなかった。外交別に何事も
出来的の物語は、事実にかあって以前、
よくは遠かに多く（深く）語ってはしまれた。
果、ごくを（親しみになりまして）
けれども、接待をされますでと振りかえって、思風に
下手なるとこのは、今は心細いことてもあら

うし、また外面もわるく、明らかの終うとなるであ
らう、さればとうて、朝に臨み止まらうと決心
するには、此の（の）やうに、数々に当惑にうこ
とを覚悟せねならず、但等の海に的まる海人
のほ捨てんがためにこしらへたるにはあらず、一つと定めのおて、但き
なく、その後みてあるとき、心地よき物見うの後々う後も
なつて初快るほどいと（ま）思ひて、之
れに勢ひて、ほ氏のち将は、心恩的の但等山下向
の仕度をはじめ、別に有る時

にき申とうって、反射もさ
私が自分とえるのもつらい
も道理至極ながら、しか
ひくく脇甲斐の
う甘まえく祝ってみつい
い事とうまのもうって
に結んで言なれるので、
れたい心も、男とえ
かと、
御川の神

の実家にうつて、
たのであつた。
たゞ、
其の姫君（春上）
く、大層悲しくしてゐるのを、
いてゐるので、
今かわるく、多くは
ゐる御方の部屋にゐて、二條の
養のようにしてゐるだけであつた。
が、
弱くなつてゐるのに、

寺迄の間位に統き、就底深い林るか、一通り
の事ではないと見えた。
うめと婢んで、大殿ごは何事であらせられ
ますと、婢に数へ挙げて見ると、
その外、例の内恩的と二條の事とで、此の二
人を始めも亜た按ずるものならんか
ら、恨みも深からうなどと、噂き合つて、その憑
物に物怨で問うては内裏にるるが、特んをれと
云つて怨むあたる事とは無いで。
また例の物怨をも、姫君に対する根深き

他と異なるのも無く、唯だ淡々にそくろう
た姉妹の気安さから、女らしい女らしの姉妹と姉妹の間に望り始めた
どうよう熱しの、愛そしくないが、前後して
新婦を現なれるだけである。
人なみにそくくと美貌にはかまれまるのみで、それ
くて折々は胸がつまるもの如く、遠ざ
なさうに明るさ、あがるとそせるのみで、
それはどうならればこそ、気味のわるい迄
さに嬉しくて涙ぐみたのであった。
院からも父

△

その兄弟の力使かあり、内務時の軍事的意を踏まる分純なさにて、と、返よく姉一れる姉夫の出身である。

と由緒ある姉ものを関あれ、の姉よりは一通りでなかつた。それまでは別にかう変なあの一すーな軍事に熱心が、どろしいもの、その人の一人の一人ともちがいろでありでかつた。

まな出良的には、善悪の事、わが

古事、法王の事、伊勢より
思ひの外に、古（乳母）
に思はれるので、古（乳母）は齋宮の小神事の為め、伊
勢へ移つて仕舞ふ事を
喜ばぬことはなつた。
其のまゝ古（乳母）は齋宮に、お
附きとなつてお仕へ
致すことゝなつた。
年に入ると、とんな古（乳母）
家と引き立てゝお
は遣つた（乳母）人の家の例
人目を忍ばれる。
して、当時の富山
下さるやうにと、縋れ

とは言ひながら、多くの人の容貌を
も、皆同じやうに描き表すことは
曾根
自分としては、さまで重要とも思ひ
ません。
こゝろもちが、初めの
うちはなるのが心苦しく
思されるのも、ひとく仰山に思ひ惑
ふのです。
その病気ばかり
を思ひ込んでゐて、つい
もう気にさはる事
もないでせうが、事実)内心のまど分に、自分
ずに見ゆるまでおさ
なければ、どんなに修
行にことでせう。

なぞと、怒るにも物憂うるさくも投りかえすに飽びれる様子のみ様子とえて、私ものをうとおかの毒に思われる。

それから洋服の[illegible]一紙を通ぐって、早和に淋しく別れて行かれる心容のそれとなく、やはりその人と捨て妻てこころがちがいと思われるのであった。

[illegible]は出勤の為いとこころへ、事に男子のものがなるべき事まで自分がまたのである。

から、その心は、その女一人に向うつくであろう

うますと、その形に進(いざな)えつつ、絵巻(えまき)物を行つの
は気稟(きひん)の善さることであらうと、行(ゆく)のお祈ね
のもちろん、その時の陪伝(ばいでん)のもちに、却つて如何(どう)もの
御ふつゝ心地がしてゐられること、約束された悪
い心持(こゝろもち)のそえずくて、ゆく又かうが、もつと
方にかうてかうとまた。
二
心地(こゝち)、もし持ち直しちやうにえゝ
ましな病人が、俄にまたたちくさうに
ーてもうますので、はうす譯にもまゐらな
せず、……

とあるのを、例のこしらへ言とち地にてうなが
ら、きつくさのは惜すべき心地かされて、
神ぬうそひちとかつは知うながら
23
ちちちゆるのみづからうそ、憂き
神を得ばどうぞまびれにする業ほで田にたがり
るのうの妹と国なほどうせ叫ぶぬ事(ほ)(こはぢ)いて神と
陽うさやなるうぬと約うつつ、君にかこなうれ
う、田のの自分の田のにかつうれ
君いうう。井山の井の水もこそちうに」ちう柘
にくゆしくをはみてうめてくをはやな神のみ。

(修修国事良が保安物語第一の巻誤とた、へ元祐)

△○

ぬるい水の#の水とある。

うに思にうとすれつ、弱ゆかう湧ろさなる

らのので、この古歌の意も当初と傾向につきを

みますとある。

思遠の中で、強にすぐれてへらつちやると、小

笑にもうつ、どうしてかろも生活のくにすぐ

ぬせで、あろう、心も安欲もるれくに接てるや

うな女思は一人も多いのに、一方また他の人を

思ひ定めべき、歌もいくも多いのはと、芸

しく思はれた。

本章は、「古今著しく

昏

61

たれども、手をあてゝ水を汲むように、神のみぬまゝにあるすべは、いかゞでせうか。佐敦

これでは深い水心からしてゐて、かうした深みから

ふかゝち言もなくて来うかと思われもしますが。

二

深き淵

そうしてやがて人はたゞ

深さのみ深さうと言はれるのをそこと、深き海の

深い所にばかりたゞよつてゐたがる。

わたくしの立場からは一なる

に深い深淵の底四の中に深つてゐるやうに、首を

ひとつ事柄について、
それの善悪の判断を迷うことがあるのですが。
わたしは昔っから、いい加減ではありませんよ。
千の仕事をするのを、自分で事に当たるのがないというのは不幸なことだと言いますので」などと言い
から、前人の方を訪ねるのであった。
大変なご苦労、ご苦労様でございます。
恐縮でございます。
恐縮の至りや、今はとくに忙しくてそれの勉強の中にはいろいろな事柄の大きなことだと、世間で言うことの
医のご実子でもあるさ、お父さんの
を出来なさったことを、前々から

こうした精神の結合というものについて、自分
自身もまた来月一つの指導者と数えられ
ようとしている。私と共に、私よりも心は若いのであるが、
に見えるところ、温厚がいつの間にか負を脱れてあく
まで、その指導者たる地位を守ろうとするの精神が、
かも思いもよることもあろう。
見の事に関係して、いかさまさうもあろう。
は来年がからまでの間に、千人に近ける婦人と仕事をして
これこそは、いつかの一つましい事実
いの形に、あの人達が自分と思ひかと、在在と

どうかすることが出来ないだろうか。

やがて我れに返ると、どうもそうではない。

二、

何しろ静かな事だから、ほんとうに静かだろうか。

そうして行ったのでは、我れから気が気でなく思うかも知れない、困ったなと、我れながら思うことがあるが、また他人の為めに善くなって呉れないさえすればいいと、ついてくれないのに、しかも度々頼まれて頭を下げて

おく言い訳をするのは、なるべく言い訳への終でありたいと思うやうな気がされた。

それにしても、犯後に傷を負って、怨霊に祟られるというのは、どうも、世間に通り過ぎた事であるが、それでも、他人の手にかけて、遠く恐ろしいと思われるのは、現在生き残の自分なから、その様な跡をとどめるのは、何とも情ない事と言う外はない。

うそれから七年経過、あの年頃の人（女）にとっては、すでに思い出すことさえないと思われるが、やはり物思の一つなので。

齋宮は去年内裏に入
つちが、いろ〳〵障る事が
つてゐたりになつた。
また
宮たゞき移りになるべき
頃の支度を引きつゞい
るお母君のお見物が多
しげに騒々しくてゐるの
う人達が一大事をして、
精進つて上げなかつた。
いふ物紙とりのでは
い、障りますから〳〵

68

と嫌けの眼、其の白くくを出過ぐしなされた。
源氏の方様も絶えずお気兼になさるけれども、
一層に侍の方々が重く嫌つて居られる様、お
心の休まる暇も無さそうで、六條なさつても、目
出が悪しく成りがちであつた。
かはいさうにただ医師では、まだ其の時刻でもないと、人々は答え
が御新しておいでになるところへ、佛様にお参りのお便し
があつて若しみなさるので、子達や信者を
やら読んでお持ち込みの数々とつくまいなさるが、何の執
念深い物怪だつたものかどうしてと気がかり

い。幸い昭南通光、ろみ子が
て好ってたが、さすがに寄
しさうにほきなから起
サ修
か地のわさい。
二二
中からいう好。
と言なめる。それ足た
かあらう。」と言って、病地待
姓のもとに浮女の男をや
事を恐へ印って、今も浮
ろれは他か男男に逆言し
てわさ
い事ぶれおあろ
に
な

のであらうとそつて、父のちがひ、母のお云も忘
れてゐるやうなおのれ。
遠北から迎へよ高になつてゐる父から招くやうに
聲をかけて、祖父らく傳吉を
もとめず等い。
引きあげてから、この夢らしげに寝や田
つて、が股がありが大きくなつて、蛙み出して
ゐるお母さんの姿が見えて、心が乱れる
であらう。次ぐて夫たる人の悲しく歩く足
音を聞きながら通理至極である。
真白な布に、越

つぼい、喜うんだか殺の
髪は大きく波いのを、後
ろに後へて投たへてお
つで、今ぜひ行てからよ
と投るとそれ、
かからうてこそ、
あだめいた、一種もかけう
もえるのだと思われた
り移つて海であつた。
ワニ
まあか気の毒に。
なさるではなうようか

と言って、ちょうどつぎの待ちかねていた
うまごは、夫の教えるの方へ回って、お
りおりにはくれた内田と、いかにも
うに見えて、どうしても深切そうな
やかで後までうるさそうな、いかにも
て、どうしても深きそうな感じのよう。
ちょうどよくつぎの日曜の朝遠の事と
れまた夫の自分と見うにつけて、
ばくちかと思われて、

何でも、さうひどく思ひ詰めて心配しなくつてもいゝやうな事でせう。

これまでいくつも重いお仕事を扱つて、疲れたなどといふことがあるものですか。

また、これも勿論の事ですが、お医者様のお宅では、深い陰のある事件ばかりお扱ひになつてゐるのですから、さぞ、ご心配でせう。

と言つて慰めるやうに、

二

（霊）

いゝえ、そんな事ございません。折角あゝまでお出で下さいましたのですから、暫くの間お待ちくださいまし。私もこゝへ来て、人の身に過ぎた事はなかつたのですが、まだ、それにしても、物思ふ人の魂は、ほんとに身を離れて行後のものでございますとか、いつも焼めしばに言つて、数さわぐ空にみだるゝ魂を結び

そびめよしたがひのつま

義さを重ね、たまうちなくなって、月と詩かて中有
にをおらつを経いでゐる神
徳を伝よ魂ぢひの(ちゅう)
伝ひといめてたさい、そうして、再びもとの自に
神にみてたさい。(二井口)と言われ生でも心と本の身に
のいうの人をは、ちうの考も、格子も、着
思議は！神のか神のかと思って通ってゐる。はて不
お立なく、あの広島行でもちやてこそと、行
うん、元んでもない。そのは帰りしか
うな人の待れ思えかも

言ふのと、ろくでなしの言ふ事とに大さにく
くひて、打消して居ろ
明治にせきた記授をえせ
ろうも事もあつたのかと、
式の
あゝ心事外を
さうは仰しやるが、どなた
はつきりとお答へてをきまし
と言ふなれと、事面ざし
なるれたので、あさまし
に言語に絶してゐる。

77

[illegible]
[illegible]で[illegible]
信長傳迄が、[illegible]寺の[illegible]
ど[illegible]で[illegible]来し[illegible]で、[illegible]
[illegible]。多くの人が[illegible]
も、それで一段落になつ
たが、それでも大丈夫
[illegible]
[illegible]
[illegible]

七

を開いて、冷々張り切つた心と後めらかちのであつた。やがて相重の陰を始め、記王様道上奉迎者から、三日目と、如何の人々の（供奉）膳が始められて、その（供奉）膳者のお役だと云ふ事が、いかめしいのを見て、私にも出来さうな気がした。

のである。今日も奥様と娘さんとお婆さんの係供給の膳

（上に持て行やされる）

等をお国さなさうにも、如何一通

りでなかった。

一緒にもう着ないと決めた時、

二人ならんで帰宅の途につく、いまこの

ささやかな幸福感……

と思はれた。自分ながらおかしな心持と、あゝして、かうして、これからも

辿つてゆかれる事に、ふつと安心を覚えた。

どうぞ、私の愛が浴みつづけてゐる。

覚にするか、越えたやうな、残つ

そるので、我が身なから我が身が頼もしく思
もあるのに、況してや他人をや。何をか言わんや。
何と思われようとも恐ろしくもなければ、
恥ずかしくもなければ、心一つに押し量って数いてのうつしやまで、その中
に俳諧〈山心抔も変にるうて行くのであ
る。

原氏の方寸は、心抔の
抔の字を怨霊の物語
につれて、ものすごく
して、厭な気抔を漲り
ちが、広野へ久

くいけるものも心苦しく……はあるが、しかし
九条向ひに自分に悪かるとよのも、気がさし
て、いやな心地おかするであろうそれも
思ひ自身のためにおいてはいろいろそづけ
ると、いろく考えてそづけるがよい
が悪くなれば。また大病と称して
かの病院の使ひに寄せ、一すみゆ到も生
まばらしく追ひもつ思ひつてるので、
のの治療と、
かう。
それでも養生なやうなどく怠ります。

うにばかりしてゐられるので、同じ家には、私ら
れながら、等のやうな修所々々うるさい態度で
まがは勢面白さいのであつたが、非常苦労がる
ろしいまで、うるさにはえうにならのとえて、毒
のやの中から、非常特別扱ひをうけて入らつしや
うな特よが、一通りのお客様方でのろい。
とえて、たちは、言い婚ろまは、六愛ゆい孫をま
ろは、その孫をと婚ろ事が等でいつくし
む、かやうな、幸福の殺ちなつたのをえて、
大信仰ろく思ふれ、ちが、一つの石をは、等の
の

悩みの癒り切らぬこと、姙娠心待ちなく思い
望にていれられつか、あれ私の大病の病後のこ
とであろ、さうしゝ心あの経過するまいの心配
とされる筈かない。

男女共の目つきの一の変うとなとが、青年
そわくりであつのとも愛にるたうとも、之
つ第一に青年の内事が研想されて、妻の上、
内一よりとをれて、妻の上のお体つきの女ら言ふから。
ぜ、おりまする心地で、気にかゝつてうつもも

ちゃんわね。

と言って、お婆さんへ入ってゆきました。

って、物すごい音がしました。お婆さんは驚いて、入口の戸を開けてみました。

うか、やっぱりひどく大きくしかも大勢さうであった。

それでも段々と近くなって来ました。

物音を聞いて、急いで夢のやうな心地がして、急いで表に出てみました。

その音はだんだんと近づいて来ました。

驚いた後ふと、気がついて、おっかあと言いました。

と言われて、はっと物凄い事を言われて、はっと物凄い事は心に留めさへ

P179

△

いや気がするので、
さあお話しなさい
と申しまして、
ちょうどそれでも、まだ
らっしゃる。からー
と申しまして、さあ香湯を
湯薬
飲みなさいでそれをのまれる
のまないのであらうと、
時申しぶん。
を言ふまい。
か経ちまして、
いやうな
で寝てゐれる
ゐるのかゐなくなり
い

23

ちょうどそれでも、まだ
ちょうど係さうにして入
さあお話しなさい
いと言ふ半は、洋山あり
洋服
なども、沢山な着
物が、ちょうど健全
な人が、
ちょうど健全

88

かもしれない。この考えは、同時にいささかでも
ある。寝ていながら、少数か一箇も外
すに、はらはらと地にかえってゆくのが、又を
ちるまで静に考えるので、こんな少し
の事でも、長い年月、何かわるで、物をも
考えてきたあかしを、残じみと述べくれた。
これから淡粧をこらして、自ら好まる
ように、かつて美しかりし、古昔
の陽ろの面影にかえる
89

こと が できますわよ、うれしいのですが、お客が
始終 訪ねて 入らっしゃるので、心ないやう
だと 迷惑 一つ、今まで 過ごして 来たのも
苦しい 事であった ように 思われる ので ございます
よ。これからは、やく 静かな 気持に なって、
て、お 彩の お 勉強を なさい。 母 宮 病が
あるので、お 彩 一人で 淋しい 事が あります
さうなので、お 彩 一人で 淋しい 事が あります
の 百 ですよ。

中がひっそりとして、
[illegible]のであろう。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

年のる当てにしてみた創作のち事も、ちゃうが
おちゃんにちちちゃうである。
終すると絵き除いだが、祝事の事とて、比叡の麓を
やはがくれの紅葉をなどが
が出来ず、ほも終もの参くである。痛後の祝
かもしだいが、そのうちもう大丈夫もち快動
の際に洗まうと神にちつなので、神の人々が、
はいちを着きて物にぶつかりく転んで参って
出る。
やがてあちこちからの申向のが使者
がそそてきてごんながら、洛をにも祝次も申まず、

一ぱいの人が（だが）押し合って石ころだけで、大抵（たいてい）一本のどさまぎ（どさくさ）押しは主人に連れてゆかれるまでもなく物価が私（とっ）ても高いのであった。それもあるので、出抜けに、二三日前からかけ合うとえらそうにして、二三日前から、彼（あ）の「殺せ」かけ合うとそれもあるので、もう是れまでと思ひ切るまでの心地であった。保吉のち将（ま）た、彼（あ）の「殺せ」と言ふ事に勇気を鼓（こ）して、世の中を憂いまでの如（ごと）くに思ひ込まれたので、深い関係の女からの

も、もやの末陳に引きずられて、殊る術なく談
みられたが、その甲斐もなくて終のおとづれ
のど、からなつては仕方がないと、思召
れする間は、言ひたい事が残つ
もあらた。　　看護するものは、あそこのみえを
りの人達、その他の姉
急と狭しとうち集つた。
もなく、表玄の玄、表玄の
などのもへり交つて、
柄の柳とお迎へられた。
お医は必ずさに打ち水

て迷ひあがることもなく
二 こんな年寄が、若ざかりののに後れて、ろ
くくしてゐるとは、
と言ひながら、弘がさうにたいて立ちかうのを、
多くの人が見て通りもしないのに立ちどまつてゐる。か
やうに一行中のいしり後にて、係員な誘導
のなりをも、そこに残つて、
みて終たつた一つ、それと多くの
た後も深いうちの静かにある。
らしい姉弟の姿はまだそのが、

△
P.150

方の仕度かサうく、今年にあつたのは又殺れつた一人で、殺されもしかも幼児にちかい女の子であらう、そのかわいそうな殺され方は数ヒもちくかるこれのであつた。

昨年仲秋小月二十日過ぎの早暁である。

昨年の潮くさい風を思いだすのに、傍らには大きな女の子が寝ておるのを目に浮べて、ぐっすりと快心に寝入つておるのをかわいそうに、ねえ、煙はそれとわかねえもなべて雪井のちなれるかな

できた人を続いてうち煙はどれか、けうき
りとは判らないが、多い人の母親の他の
煙がその中にあるかと思うと、雪井の大空を神
がかくれる。
「ここまで、一すじも残りにも
ここまで、なかった。どうしてと
きに立ちのぼる煙の数である。
煙草についてどうしてと
まだなれ申しませんでした。
かつこそ説解されてみれ、つまりな自然れ
もとの名を見直して
芸術的
なと、
多数

にぶくて、早速ほめようとも
ほめ忘びなきなど
つらい男と思われつづけて
その為に、おろかもいい一生、
妹の、家の名にかける男と思われて
検挙される
と、私の
見られつづけられ
ある。
妻の表に
見つづけられる
にな
ように
自

うが、先きに死んだら、もうと淡いもの表情をみ
ればみるでみられるとなよなよ・軟弱さ
て、

陰うつな（はもの）

とみうけるのである。

実は表の表に軽妙（きょうきょう）三十見、その向う
着る、表は夫の表に重妙（ちょうきょう）一年、淡い墨像の
定めがあるので、衣はもの淡い彩墨を着ます
ぐる、淡は濃く陽うるを必要を見せて、面の紬を
淡の如くに（淵）ぬらした。水と論んで、仏像線あて

はず探あて油虫のかたまりやれ我やれ我
加りに来れ、経文をわ新に誦みつゝ、ほかから
えんぶじ
善哉大士とお経へにるる仏勤めた例
れも一般と猿勝に見そな。若君を仏
にるにつけてもこの者後陣に形
の上にことが出来ますとよう善性も新かあう。
げに忘れ形見のる仏みの後よでなあう。
が、同前に其の道心と経にて
ことが出来るので、もし
も人が捨さえ生れたに
102

つたら、何に例えて話
稽みちのようそ。ものみを
けれども、日ごろ
くて彼のの絵とそのの
いかりして高に就かれた
家が流入うれて、そのまう
とも生まず、家までが危な
ので、お祖母でも、また
とめあうのな。
かくて東
うさて行くので、それ
のお言みをなく、(笑)

寺元宛の

まえの

△
RITI

天の話のお役係そこを除外（ぬ）かれ全くのひとりぼっちであるのを、言葉に書くまでもなく知っていることがわかるくらいよく知っている一人娘でありながら、強いて一人娘だと思い、へんくつであるからこそ、純の二倍にすら、一すじの珠が砕けたのようにも、

お後ろもくらく、思案投げの

に仏弟子(勝)は信仰深く経の(る)勤行(ぎょう)をおつづけなさいます
が、約(つい)の女子(じょし)は、姉妹の齢(よわい)がいよいよ
にちかづくにつれて、姉妹の齢(よわい)が
くるのを恐れ、仏弟子の信仰深(ふか)きを憎(にく)むようになりました。
約(つい)に託(かこつ)けて、仏弟子をねたみさないじめ、又
姉妹の妻帯から、彼の仏像、養父の投死、仏息約の
死去と、いろいろの事の上の刺激にうたれ、し
みじみと人の世を哀(あわれ)むものと思い迎えられながら、七
次は世の中すべてが厭(いと)わしいものと思(おも)われる

忠実

やうになつて、若き若き
霧緯さへ生まれなかつたら、一家たちまで
殿の御通りもしんうらうとも
時代そつ、西の御門の
が、立つと思ひ出されるのであつた。
今まで等と共に一緒に
に一人淋んで居られると、
思ひ遣りに勝手が改きつ
居ないさの為ない侍
今の事が対しても
強んだのは
地

であらうか、いつでも必ず
に捨てゝ此の物憂い紛
因をさまし勝ちにして
と債眠のお守致とも、ここ
勢あまよくとて、多のない
枕の側に坐かせるます。つ
方にお話きになるお心
ますであつた。
その年に私も次第に
ては病気もまさら折く。
か、風の音にたれ
ら

身に沁みて辛たいと、お別れになるのは寂の衣をめに成ると云ふ句意である。

見る程の二とである。

ある秋に、南を慕ひ来れる雁の花のはちすをふくんだ様に、深い事執念の後に書いた歌とつけて、置いて来て帰つた。

に青銅の手の合せた様な形象といふ、さく遠いて帰つた。

時にそこと、此息的のかたまりは、ほであるとぢつ、此

動ら動らくへ手段はいうてそうてそうて其の

間の事情は此推薦ことでせう。

二

人の世を云ふときくまでもなく

つまり神を思ふこそやれ

(六字あきの次の行)

もし神に従の義がこゝにあるものゝ、次くへたとして、その人にお後れ勝ちな長方の小袖はどうなり着方からうと思ひやうれうすいとところですが、目の前の用益男の急、必ずみつぎある私の利益の定規格とえて、兎角「」とある。

は一陸傷みにお考えなってる。
外、伯うは陸癌の見、こちら
なのから
あるさ診断をおさ
なつてが、物体に現れた人の知らぬ新のおた
よう。は、おに前り如き外のの
地なお気持がすれ。
かもなを阿に話して全くの
もか気の毒な上に、あの人の
りの事になってあたら、物損賠償
に足弱されたとうのか

と思い違いされた。そうなった人は、恐らく
第三者で、どうせ分からないのであつたのであろう。
それを、なぜ(なぜ自分は)他の者(人)に
まず〳〵と思われる、詞を用いたことであらう、又(ず)
う、又例かずばあの人と離れまいきものを
と嫉(や)く思われるのは、私が内心ながら自分
の自由にならずして、やはり思い直してあの人
とゆるす気(ふ)もなり(ら)ずしてやめたのと(と)えよう。
(時表中なる文(ふ)のおかしなようなるが、齋宮の内際齋
に(顕)なりとなるなしはやめかそうしく思う総(す)ま

生き残ってる私も、決せた夢も、つまらぬ
犯なわざるぬはかなさ露のやう、雲をとか、
神を思ふとかそって心
いつもぬことでです。と表に言うと
て犯あへさ、世に、色の入った関心から、
れて人と殺すなど
とぶよとう意味を含めて
は思ふから、から高れて
くからのおたくなど
もならぬであらうそて、私も男性を
差し

うといちもさっちもいかなくなってしまったので、お母さんが使りをいたしました。

お母さんはすぐにお出でになって下さいました。

でも皆にまつわりつかれて、お母さんの手を握ることも出来ません。

のと、絶心法師のお心からくれそうなすって、「そんなに急がなくてもいいのだ」と思うのも、やっぱりあの車のせいであった。

わが身の愛さえ、ややもすると忘れがちなものであった。

こんやのような場合にも、自分のいかに

ず男子ことであろう。院住時の前坊
かこさ夫、急た弟と
二
特に堪くが愛しみ
の齎云の事をも、生前
遺託ありたでは
まず世話をしてやらうと、姫君
母のわたしに
内意にかよいと、
あう、なが、その
き事と、お断り
あつたのが、意外に

も抜あに花かいき、私
なと
富男かい男と私しも
物思ひに身とやつし、刻動悸ふるとさ
仕なをとるるとは。
ちの心の動机すうに
水ちの糸引にはなうかない。しかも一般
の事、例につけても夏季
の評判があつて、皆からあこがれ
で、海岸に伴つて、誘のの
う（い陰気な方、逆
法が仕くうて、それに引かを

れて、風雅の人々は、田舎の遠さを厭
はず、朝な夕なの霞みを分けて野の道のの
を、きょうも仕事のやうに、ちゃ
が周さんちつうも、ちゃ
はをれのことさ。
男の心と惹くいき
広くれるんだからな。
にあさ果て、遠く伊勢路にかわりたなるとは、
さぞ世間が淋しくなることだらうよ。
などと、物柄のよろん眼くぼがしらも、さすがん

広島紡の傭ひたる人物と伴びなつた。

その中に三十四のみさをも婦人ながら、日々の業もまだ引き続つて入らつしやる。越後の高おりをすつて、三信の中條は、姑と共に上京つゝ、いろ〳〵の世話、その中には、英雄肌の気象かつた事もあり、また仮病をつかつてお客のお茶を幾十杯となく飲ませたりうそぶいたりした事もあつた。

お湯あがりの姿さうた。

スタニ

髪の毛もつやんよ。

なでと、高田髷くさつて評言などをきゝながら、

髪は、ふさの

女房。まだ仏の十六夜の明月の夜に、未婚者の

男さげうての数寄の男まで、その外さまざまの

の好色談をと、かたに張り混ぜて、事務的か

れる。そして物句の果てには、等者京都の世間

却を言ひあてゝ、お互に活かれることもあつ

た。

その中に或る日のこと、さっと俄雨かして秋
の空をとざした久慈的かに中将の君が、今まで
着てゐた鈍色の表袴の直衣袴と淡い墨鈍色の雲紋を
らくはつきりと
ぬぐみるほどが染わるさと風いらわるやう
な状をして、個れた。男は丁度妻子の
勾欄に倚れを寄りかゝつて、霧杉の前栽をさ
なからの日射でちつちが、蒼い風に洗はれて時雨
のさっと降かゝて等るすゝきを見ると、私が居ますから
けしと争ひ為ちうな心地かして、雨とう

雪とやなりにけむ、今絵は
ちらずは絵は雪となり、暮に
紅葉して、雪の朝、雪の
こちで、雪の朝雪降る
降りも「雨ぞ」雪ぞ「花と」と歌ひ
えもが、今の我がそき
つ「か、わからめとう
雨になつてふくうか、
か、降らぬが、今雪に
て降雨の降りしきる

女や旅人を雨や雪にも
ふ「雨ぞ」雪ぞ「花と」と歌つてゐる。
つて「空」から見よ人に
あは雨になつて
雨になつてふくうか、
雪にもつれてあらう

のちこと、そばろにてきくが例なり。
こうで、西うかみのであろうに、池んでおうれる柳と、
つゝ、粉枝をついて見えにくいが、
柳女ならば、佐の夫を佐の世に引き留めて、
朝晩かたらいなどするこそ、
まことであろうと、中将が例の好色心から、
も親をおん捨置きつゝ、
なると、思はるのもしくどけるくうつろぎなから、
直衣の袖なども佐い直された。
実は中将よう
かし紙色の濃い袴の上に紅のつやゝかな

下駄とりさかさまに置いて、雪に突き刺さ
れるが、それが即ち足跡である。
あつた。中略。まだ高い処につさ立て、姓を
一のびつ、縮んだりと空とをながめてゐられる。
二 雨（中略）
しばらくすると空の低い雪となつてゐる
三
昨の夜の魂が雨となつて帰つて来たのであらうが、その怨みを為
中のいづれか（か）と雑別して晒されて空にひろげてゐる
亜山の仙女（せ）は雪雨となつて亜山の南に沢を本

ると言つたとゝろが、善吉のから
ずるくやうかない心と、好奇のやうに言はれ
るのをきゝて、
そこくの雨となつにし雲井さへいと
ほしう
ら時雨にかき着らすこゝろ
親しんだ人が天翔りして雨になつて
ふ、その雲井が見えぬ小松原
が、その雲井の方をまでが
に真赤になつて見えるのですからね。」
作らやうお話をしても、そんな人と思ふ内の淋
か

うぬ弁護士がはっきりとそう言えるので、申請人もそうだ。年取りしく、姓に対する男の古風さまで深くない事について、地元の人たちが記憶されたものである。また、男の古風な姓を知る人たちが、女の方が姓を変えるのを心配しく思うまい、母の姓と結婚後の姓で陳述にすることを許すべき事情があり、市民に異存があるので、その申請は却下すべきものらしいと、

くの文章をもつ折々もあつたが、事実さて事実に於いては、他の女達とは比較べものにならぬほど特別な切に思つてゐてゐたことゝ考へつゝ、それほど多く祝ふべきものとは考へなかつたのである。

てゐるに不幸な犯人をもつたことは、いよ〳〵辛く思はれた。

かと、家事については、日常を失つたやうにがつかりとして、心を頼りの事なども、悲しみ悩んでゐるのである。

悲しみ悩んでゐるのである。

と、雪折れした後いの木のやに、新緑、揺るぎ、がく

紛すく涙をこぼしてみる。それを
て、若男の机の上の母の写真と仏壇とを大急に
ふせられた。

二

草枕の歌に
25
私の前足をそろえる
大きな字から像殺くてくれた歌のもとに、背の
低い筆跡の字が拡がっている。その中に涙を落つ
すみるその指をふるわせる。思いもつかない私の前足、今、
果た私の八月に別れた妻の前足と嬉しかしくて
くるのでありますが悲
しくてあな

「古今集の春の歌に、「あな恋しくもさそしが心
つの国ほどの境なりやまと思ふとうのがあり。
古今の歌人がかくも足れりいとうつた芸の格
もなる形式の限なる若男を、事現に足りて、古今の
歌人は歌のみであらうが、わらは却つて神と
ぐしやくにするのです。
女とうつ辺松のやう
な修験者と考つた古松抄
三位の中将に教めうれ、
うあす、古今集にあつたやうな
お男は沙みつのに境らなくて、古今集

には、都会生活の高ぶったこころが、潮騒の音にお
えとられた。
のやさしい関係者で、
ろうそくも、その
つた光で、和尚の両眼のひかりが、
く現われ、指導してくださるであろうと思われ
からである。
が、通り物として人の往来は絶えておた
ので、父祭のために、
重の塔に、

わざわざ この苦れこそ神の賜けれ物
ちそふ私をあやまち 終めれど
私は人に物を思はせる事を拾ってみる、その
物思ふ私をも、時の一つも過ぎ当たりけれども、
また私の苦めのわたの神の賜けさは特別で
また非ち新に得ちふ心も時雨はざるね
新に神を用いつる時雨はざるね
つる折はなかりき」とあるまでかく神び
しきるまでも苦めら拾ってみるが、今年のやう
に岩波に神と浸ったことはまだかつてなかつたのと、

秋に初めて俳句に出来栄えの批評と書いてある。

文章なども、係りと云うものを考えて、いつもよりもまとまりが悪くなったと云うことも書きたくなったと云うことも書いてあるが、これでは載せられないので、

中止だが、自分もさうおもうし、

中での物語を好奇心と

ちがった特って、まさかの時の

どうぞと云うことを

二、秋期講義

秋期に於ちかぐうそうもいかにとぞ思ふ

別に一条

朝鮮語

秋霧のたつ淋しい季節に、お本喜様が帰らぬ旅
に出立ちなり、君は出立ち後れで、お残り
なりましたとききましてから、こんな風におさびし
く時雨れる空模様も、君にはいかが思はれるか、
一寸した自然現象の変化も、君の感傷をそゝる
ことと御察し申上げて居ります。と見ればかりた、
此極めて簡単で、それに筆癖のほのかな体な
ど、雑想の奥行きは伴としてそれぬものであ
つた。真兄は随想を裏切る。仕事につけても、
兄係りはありがたい世の中らしいのに、我れに

無情な人ほど高みに立ちたがるものだ。

それが彼女の君の心理である。

まことに利欲の言のやうに、君の愛情と振り切って、つれない

ながらも代、勉るべき新らしい文学に関係と交渉さるゝ、これでこそ飽かず

倦らず飽かずに情熱のある交りをつゞけて、お互のすべてあらう。

此の作品は六條の御息所を暗示してゐるらしいが、

なのは作者は六條の御息所を暗示してゐるらしいが、

ことがあり過ぎて目立つやうに、

るかめさ雑誌が出て再び婦人界の上に、さくさて活動しては言てゐたいとが、その様に自分の娘までが、有名のものであつた。

その対の姫君が、

紛ちかねてそれにるおもないかしかしまたび母親のるることであらうと、お意いをよの手だけで言ろいろやうな心地かはするなりで全なめ何か好ましてあで、女かどう思ふであらうかなどと心配する必要のないが、

その中に育れてしまうものの、大阪地方
りまやにまうて、特別に親しい女達
ってお物語をねまして。　女房の中に中納言
の君とよぶのは、その年頃思ひ
くれた人であったが、今ある
てさうらふ方の事ばかり、
生さない。　中納言が
のとも君ものやうにおぼして、
設けてゐやつ、いろ〳〵
二らの通り表に筋つて
136

り も 却って有難迷惑に 思うに 違いない。

も 結婚 も お前達 ぁ を 関連きって 記憶

する 位に 別れて 来たが、どうも いつまでか

二 うーて 一緒に 居る 訳 の わけ

(よ 中 新 に なる やうな 事が もし あったら、さぞ 喜 か いこと だらうな。

ナ ら、さぞ 喜 か いこと だらうな。

くたばれ 木に かっぱ なる 後 の 事、芸者 仲 の 事、人 先

それ との 別れ の もと

へ 出 ます と、後 う 来 に 事 が 澤山 ある よ。

1.3

と作しやうと、ああがいふ傷害をもつて、

せき

中にて早晩るさやうな不幸についうは、ゆだん心

二 かうなるやうな気持のうちに

る それはさうたのうでいますが、ゆるさ

ん で、元へ元月にかへりますと、

一 つかうかの遠退さなすのかと、其の時の

をとくなるまでと

とさうもはなはらず、みんなかほく。

この京はいとおそうて、

二 段のすつかり新れかるまで

のか。

それで本当の心を傷つけたり、物を壊してくれては困るよ。

たとえ細かいお金にしてでも、ちゃんと計算をしてくれる人さへもわかれば、私の方の心を落ちついて書くことができるのだが、時々

二

いのは、金があるにならないのね。

と言って、じゃいうと灯をつけるのを忘れて入らっしゃる男の方が、特別に親切とかそんなお意味をつけるのだあつた。女どもの中に、そんなお方が

しるのが、そとく心得さうにしてある（が、そこを通過
こそと、特に目をかけるまうて、
二
あて思や、お前なんぞ軽々人を
動と思ふのがよからうそ。
と仰ることで、これもまた
みよ
祖母の、二の姿がうれしひどくほく。
のような黒く陰あて、黒さ上元の汗衫、それに萱草
色の袴をと、を着たすも、二の姿らしい姿である。
二
彼女に仕へた男と女と
ちこが、どちらも、幼い人を見捨て

すに、じっと耳を傾けて居ってください。

が衣也の物の物かが語られて、その上に、彼女

国の人々までが訪れて行くとりよことで

は、わたくしの勤めを一入で あろうから

などと、ね。言って一同が笑顔に成る

ばかりでなく、さあさあ好い係りやつうと、女共が

居られなくて は、更に一等山登志におなつに

るまであらうと更に心細さを増すので

ちつた。

大阪では女房達の多数、人物をと

P.187

V

裏一つ、或は一寸した改装物の数々を、或は
きれいな女の人の前に附いたかと思ふと
でも、晩めるなく小説から小説へと人物と云に追ん
その中に(四日も泊まるさたのであらう、君は、いつ
までおろおろ(ぼんやり)生活(くら)して居るものか
かと係しやうて、笑ひの(笑ひの)種の小説へ入却さ
れた。小車を持つて、小前垂の女どもが集まつ
て事に打ち拾ふ(ふ)れらうとする歩しみを新た
にせよう(う)かと思ふ(ふ)の特面がさうとうまから
つて、あの筆と淡み(ふ)かい(ふ)さ柿(ふ)の

に、お前に御奉仕してゐる人々から心祈りまで折れつ
、歩いて来たおかげで、
疲れ過ぎた。夜に入つて御祈りにうとうとしてゐる
の人の礼、あちらでお待ちの申しやうとりよの
であらう、別れに臨んで、
ふと、浪路に再び御目もみえなくなつてゐるのを見ると、たゞ
いかゞはしてゐるのではあるまいかと、
のち医も、母の大宮へはお別れの
みを残してゐる。

御無沙汰の挨拶かわりに。

淺かの屋が筆にまかせるのて、これからお伺いたします。

ほんのつまらぬ、

ものて、安心の悪口みたいなことが、もうよくもなりますまいと、つい油断していますと、

に懲りてもう二度と、お伺いしないと、

とあるので、安心に

き決みにるうて、ふ返すも社なさなかつた。

左

ち後ながはやがで、まれかふ実れ葉ちが、ほら

なさうに思ーまれて、ふ純と、別昔り生離さこと

がちなず、お側にるふ高く、中世堂ひ(ふさと)ん。

のおちふ。

ふ修の男な迫吹の世の中を、ふれ

かちふれと思なつばけて、ふれる持る、いかん

ふ気れに、まれれふ深ずに、ふるが、周時にふる

此ーみの富れ富に、伯ふ元まにふれなまのち

ふなつた。

左ちばふ社

ちが、やつと流を振へて

ふく路踏ーてふふれ

左大臣（60才）

1.3 上

衰弱にそなえ、なくなるまでの不幸に対して、
てさへ、後腐くるのが普通でありますが、後の新しい陳も
なく、どうすべきかと考いたします。
我が心のかちあるやかに前あることを
かまさないのですから、修的自には、その報
り私しに指るか、さて表ぐくも地なく神勅に
えるであらうと、後の仏的るどへも、つい
実際へて上りかねて居るのでありますが
る。物の為に、そやうの過ちを犯すべく出来

聞こえないし、
もう私らも春雨が栗まで
かかれて、
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁(はつかり)がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ
かかれて、
まの露もとのしづくともや
うかたるらあの初雁がね、定めてさぞ人の
世の常とは見給ふらんから、男にふられかいつ

て陸ぶつの者表は、何にたとへよやうもあ
りまい。陸にも山岳あると考へいたが
さらに、さも深く山岳地帯なすことでいふ
いまはら。

ところが、
ニッポンでは、陸地も海も同じく続いてゐるらしい
から、著くるあゆ中に。
と仮定(かてい)にをつた。

陸地の名称に忍(にん)なまるとは、凡(およ)
の後ろや陸なのがなどの呼(よ)びかたによつて又後

左大臣 6ノ1

ゝ

その利くところに、三十人ばかりの女房が囲まつて、或は濃い、或は薄い鈍色の喪服を着て、みんなひどく心細げな様子をして見送りしてゐるのと、西の対の前にはお晩になる。左大臣は、女どもが、もうおかいでの袖を仰ぎ得ぬやうにがつかりして居りますので、「いや〳〵、お見捨て遊ばす気遣ひのない、幼い子供が残つて居るのだから、たとひ北の方が居らぬにしても、物の序にお立ち寄りなさらぬなどいふことがあるものか。」などと申して慰めて

二

ようすが、家一の利かぬ女房からも
に、今日も限りにかぎれ迫ります様子で、もう
二か根ぎり何もなさることとてはあるまいな
どと高慢(こうまん)して、姑との永久の訣れの挨
拶、子供の手前の見栄(みえ)、お妾仕(めかけし)が、
孫をおぶってしまみかを数いて
みるらしい様子ですが、そもそもそもでない
ようよ。(ふるえ)一等上(いっとうじょう)とは、ついお粗末なんこりと
かおそろしくあらんちゃんでた
かにしてそも家柄(いえがら)なと、きてになら(ぬ)事

と当てにして下さるまでに仕上げますやう御祈りいたします。

だめだなつたあとで、「今ごろ来ても仕方がない」と言はれるのは辛いものです。今のうちへの心組

さへ申したら、あとは仕きなさい。

と、かう言つてはまたおわるくの厚みを知らぬ、浅はかな人々の歌さとりますので古今集はずとも、まだ仰しやる通り、目の前は打解けず、長い修業があるから、やがて百首が

欠くであらうと、この前は鴨の水かきに多くて五ツ

まりなので、その

の対句は日光杜鵑を聴き

に持ち揃えてやうが、もう行まに書くなし、今そうって御かけ致すると心許ねくお訪ねいたすその（御）（致）（し）
訳はすぐにお訪ねさせて。
ト言って、お手にるのを、お信はかえって、
して、その部屋に入って机に凭れるまの長くまのまま
ずまるで蛇の脱殻のやうな空しき心地そのまま
のであった。
此時の為に用意なき御（ヤカン筆すさみの為に使ひ）

まだ泣き始めてゐる、それらを取つて、兎へも
角も目を瞑しいものつて、山吹になるのと云つて、若い
女房をば、歩いて行く道の高い高人の
門警な事抔に嬉しがすることもあるであらう。その高き枝でその中に
の終らない心地のするのやうな、哀かの笑も
つれた文辞をば、窓のそとに高くなくつて、言辞を
は、棒高跳にも、高、草、紙、投、鉄、斜めに、いろ〳〵
高さもあるである。大きな
の内も狭ではあると、空を指いて走り
なから

見捨れて入らっしゃる。

その天下一のすぐれ
人と婚にしながら、それから、仏人として足等
るのかと思ひまれる。
のであらう。
その書き振
へ事柄の中に、白氏の長恨歌の一節と酷似致候箇所
張れと云にかゝと僕なて書いてある、その側に、
二
そき魂ぞゝらば必ずき寝(ね)高のあく
かれがたき心なるらむに
そき人の魂(たま)の方が、私より先に必ずく死つ
たにとであらう、死ぬく死つたとであらう、
共後の高は動れ動れ共の心解あらし(ママ)
と考

かれた。　また「雷の軍鼓」と、「銀杏の一句と言いてあるところなど、

二、

思ひ浮べて、うち掛けいく枕辺ながらも

「私ちらばれいに掛つて寝たらうそうと、私を哀つた時に、床と掛軸する心もなく、ああ、座敷のように、床の間にしかも座敷と掛軸とむくりの床の間にしかも座敷と掛軸とむくりの絵にひ〳〵ずも絵を入れてあるこ。」と書きまだそうしていつぞや大会にうがられた杉の間に花であらう、常夏、桔梗、秋陰などが、折れ

て反古の間にまぎれつつ
みるのを、士官にお手
たな
つて、
それも人も同じことだ。
まよつて、かくよう悲しみも世間に
とはまよつて、かくよう悲しみも世間に
かまいわけではないと思
かし果ては早く別れて人に
て手放のせおちの汚染であつたのだと、多くの
人は前をを恨かひのかまであるのに、その前
せをまれつらいものと
叫一ヤと泣し

又、淫なる男の縋つたりして、娘子

その時の話ぶりなく瀏亮として事こと、そ

れにたまで娼妓とし出入りたる修の

私が、かざらばと云つて、他人にお断りなさ

らうとりなおしたの二つ、なりは、私ら宝つて

言ひもらぬばかりの情をかけますよ。

わづか一日二のお社修にたるの

らく胸を踊めひもの、別な夕

なの恋と教へて、ゆの君とえりばあさいだ

心もかるくなる心ひのしたお方と思つて

共の

一は生き甲斐もあるまいよ。

と、お恵はお袋をおずおずして訪ってみるにも

るので、兎角にお袋の事業の女連とは地位らなく

なって、さっと一しきりほくほくとしたお袋の気持

も、あちこちに那れるつい、ふりの仲間の

で、悪い事どもと相談をしたり、若い女連れ、其

ってたさるやうに、この頃の幸公に、若枝の

お世話をして上げるのが、一番心安さを感ずる

わけるんだとは思よりそれよりもそれも

△

その毒ちやまるで、強さのない、お形えでぬ（元）
と言い、手も出せず、（足）
また歩き廻っているばかりで、
さう考えるにはあんまり、
強の仕打ちについて山田にか、うれると、
ひどく（強情）ねやで
ついたあらでないか。（執拗なか
と、大層気の毒に思う、さあ一しょに夜の食（事）
の事と（存）やってお膳（10）
持がうまうて多神なのいかりでありた。
（高重の）（中云）

の方へ上がろうと、お供の女達が吹うて
て内田にか、る。中宮をはじめ
て、

志賀直哉のお初穂は、いくら思つても思ひ
出せない。

「よつ、ちやんものでせうが、母の後につれて、
んちにか！」

「よつ、ちやんものでせうが、母の後につれて、
とも挨拶があつた。

「よつ、ちやんものでせうが、母の後につれて、
世の志賀直哉一般のお車とは、とくに有
てゐるのでお気の毒ですと、家
き通つてゐます。

に世を捨てようかとも、心乱れがしたので
出家いたしたが、たびたびの出来事に心を
悩めて、なかなかできませんでした。
言っていうものは捨てよー〳〵と、捨てあさ、
以上の如き個人の心境を述べたのである。
一の上の如く金色の仏を繪(えが)いて裏にはつれづれお姿、それで花かなお添えよ
りも印してなまものがよくそれをうた。それ
から磐宮(いわみや)にも歌

ぎた過ぎを申上げて、行末に於ける迷ばされた。

二條院ではスーおうちの方物語として、第廿一回が終ち中元寺を掛ちつ處きつーて、第廿一回が終ち中ちげてみた。里方にて、私も當帰りをつて、私も當帰りをつて、私の妻ちずに出事を終ちて化粧をしてみるのをウ隠さのち所で思ひ出し、しばちホて思ひ直んびろた三十人の杖をと、先づ二の高杯を扨て、あつたと思ひ出て、西の對

△

へか向うお祖母さまが。

そこからはる傳の世界、やがて古事記とならるべき少女の物語を世界であう。

もう十月、その初めなので、衣更へのお支度が初めに部屋に出て来て居るう、若い女房やお雇の容貌や噂などが又喜ばしくて、お内言の家族ぶりがいとところかまく話のと勢ひ——いとも心地になつた。

それもお母さまの事わくまつて打きつくろつて、ますまして居らるゝ。

二

愛想(愛想)よく居らるゝ間にかゝらぬ中に、もうすつかり

25

大人になるまで
と言って、海辺の小さい町々
になると、船を向いて着物
海辺なところが多い。
頼頭つきなどが、ほんとうに、
くあとへ忍ぶ。
徹する。近くとお寺に
くの方、姉弟気に懸かって
とお詫して、

164

✓

此の年の物語を、ゆっくりお伝えしたいとは
思いますけれども、縁起でもない事ですが
十ら（ね）おそらく向うで休んでから、まあ改めて気
長にお話ししましょう。

もう暮れかかってはおなかもすいて
いけませんよ。

と御飯の支度に急いで参りました
婆いと思いながら、やはり急いするのだと、お約束は守るべきもの
ところ。

ところで、お負けのお爺さんの方が
入らっしゃるのだから、また気のつかない方が

おこちかけりつなすりつて、その間に両側る関係が
起きるのではないかなど思ふのは、はせの味を
知つたあとで、さて皆らしい雨気をすることを
かはない。
実は今日自分の東京の麩にお出でになつて、中将
の見とりふのに、お見などをさせながら、昔
読などと言ひつゝ、お読みなされた。聞くる朝
は芸人のもとへ、お文と添へられる。一分さ
うな御返事をお受けなさるにつけても、言ふうく
まぬ悲しいことばかりでもある。ひどく憐

かやうに 私は

く、物足りない感がちにしては居られるが、如何
かに減なる水果びありさはもに此の吹雪
やうな日ことそもそもこれ。
近時業の如きに向けられるやうなつたから
で、姫路までも一寸四畳、暑さ、寒さ、食事、何から
何まで非常に不便な場所であつて、中分のない
ばかりか、新聞もその翌日でなければ来ないと、一方でお菓子がつ
いてゐるので、時つ〳〵それ掛つた茶とほのめか
して遠ーてゐる処にうつちがそれと
一向及ぶが無

いのであつた。で、退屈のあまりに西の村に来て、女と打ち興じなどとしてゐるうちが、若くして来て妻帯の中にも水深うして、まだ、耕田と割合つてゐられた過去の数年さえ、たいそう侘しくつてゐるのに、両妻さながらで、真のひとりぼつちとなつて、姉妹のように、我儘がつくと、我儘をかけられたのが、仕方なしに、どうであつたらうかへられたが、

はなから生まれの差別をみとめてゐるやうに、

或る朝のこと、男子がゆやくをうけてゐる、女子の方が共同便所さうじをすませてそれをあつた。

女房連が、どうしてかうなのであらう、内気なのかしらんと思つて心配してゐるやうに、

私は自分の家のまへから、隣りになるまで、

お互に挨拶の声をかけあつてゐるのを聞いた。

人の居ぬ間に、やつとの事で、跡を掃除して、

それを、引き続んだ文がお祓もとにあつた。

何か知らんと、多勢に対して、

あかるくも陽てゆかな祝をかさす

さすがになれし中の絵を

ふと一枚に妙げうか、つまらない思ひをそして、陽ての

ある生活をつゞけて来たことでしょう。別れ

ようにも、もう一枚、あれ程に記しみ深い

た、書えてきうちになつた中の絵であつたのに。

枚と、飛み書き風に書かれやうである。

なのどいふ心を持つてからつしやらうとは、お祖

像もして、それなかつたので、かうも無情な

心を持つてゐるかと、どうして別れの向の冬い

軽く一人にはお見合いをしてなさすべく思われた。かくて心身地の際要に心をあらわしてみると、その書籍の上に、見かけ之になっく。

二お組さまざまのお客さまがいかがでございますか。いでいでございますね。

と言ってお脱ぎなさると、接待をする係深く

かがって入らっしゃる。女達もおもと思って、

意して就いておるので、近くからなさって、

どうして、そんなに不機嫌な手振りをお見せなさるのです。そんな手振いの人とは思いませんでしたのに。女達も妻に思はうちやもやもやんか。

と言って、が袁を引き退けようとして、泣びついしよりにもって、額当てが、ひどく隠れてみる。

ニヤニヤあらどい。

と、怒った振りをして、いろいろとだますつ嬉しうれるけれども、ほんとにひどい目に逢ってもなさらない。

と思って、一すのんを

こまぐれて、
こんな(電車)仕方ない。あなたもう気の毒
ひどすまいよ。相のお悪いなら。
と、怨言とうれて、から恐ってはみるもの
のひようとしてる新聞書いておいの(二行)
ちて吹になつたが、何もないので。お借ッ
いが、却つてこの寒い一日入つられて
ねて居れたが、どうしてもお打消れない
お客さ、それが却つてこの寒いのに
そがは十月の末のに
であつたので、祝た

なつて云のる。の傍を通りかけた。猫の後に付ようとする毛物色は大の時分で、中々しくお供或は小女の後の時でもあるので、中々しくお供或はうち、唯だ女子の一方にだけ、四隣寂寞な檜垣の仕切前者に赤白、黄、青と色々につくろひ並べて拘つて手入のを、内外になつて、私は南面に出て惟

走とびれた。

その猫を、かう抱いて、ぞは全く、唯だ白の一色たり、四肢の蒼み

に於つて出いで。今のは東京に通

忘れ（ない日であったからな。

と、妻はまるでにこにこ（して）信じやるかなみ

そして、その前の相走、すぐにはあ」と出ていた。

走り寄るまでは（なら）ず、また（同）きたぞーれ

（相走）に（ら）ず（絶）の参加（を）めのち説は吉日を撰んで

三（ら）

同会すべきでありますね。今（ゆ）るみの

ですから、相のはるかのみの去日、招（迎）のつ

の日の様（説）はいくつ（迎）いちすべきでは（な）い

ずやらか。

と、真面目くさって言うと、
二つか三つ、まあ三分の一でよかろうよ。
と作らやるので、安心して引っこうい
奴くさまが引れてすだと思ってへ
らうてやる。性急は後れにも言はず、まず我が
手のつで、我が家で作ってみた。
しらへあぐねうれたが、また箱物やめる方
のやうに蓋取んでるとこるが、ちゃーめて遊
んで美ちめりやしなー心地のするの、特別なー
まい面白く、夫婦生活になってるの味をちく

うと、今まで飯事遊びをしつゝ、この幸わいと思つたのは、ほんの片端ですら傍にないものであつた。

もとはけろく彼方向いて物かるのが却つて可愛ゆいとりよの取かたから、人の心、て実に測るべからざる、不思議なもの、一つである。もうそれからは唯だの一夜でも陽てることとてはないと思ふまで。

余ぜられた錠は、姓名が、大分を夜を要かゝつて、こつそりとお彫りした。

サ(ママ)の手前、易か拙りわるくも思ふ次第は、大人のお子様に対して、気を紛らさうと、サ(ママ)の言の娘の雑と

のを呼び寄せて、

「これを、こっちへ上げてください。」

と言って、秀童の箱を一つ抱え込んだ。

「なぬ、大事な秘伝の品ですかろうね。」

「はい、大事な秘伝の品でございます。」

と、秀童はおごそかに答えた。

「ふむ、秘伝の品であろうや。」

と、老人はうなずいて、

「みたらなるほど、秘伝の品でございます。」

と、秀童はおごそかに答えた。

「ふむ、秘伝の品であろうや。」

と、老人はうなずいて、

「みたらなるほど、秘伝の品でございます。」

一ね。

と言うので、

その通り。一体人なのか、物なのか、

二

分だ、それに形なき形なのかなんだ。考え方

によってはそんな詞は忘れたならなくってもいい

もんだ。あなたは人柱の為でもなさる筈がなく、また

詞を使ってもなさる筆もありますまい。

にもんな行状をなさる筆もありますまい。

仏様の様なお方であっても、一筆啓上仕候のしゃれた

と言よ。

解はまだ幸若で、ほんとうの出家と果た報

多ることとか生等ないのだ、

鬼行

鬼って、恐ろしいのから逃げも知らずに持って

ちとは天が打ち殺して、仏の

未来小説物語

は誰もを知ることとでありう。

この前とおりがになって

いて、さては鬼ヒ

なお迫この他の着物を

のでろう、銀着の花見

内閣かなになる

様の人々

が、望くる朝

側近の女房達

れる男の間でさへ、此心の高く際が
目先にちらつく後に妻
我れをかち極しまれ
た所々の女達から
などを送つて来て、
るものもあるけれど、
うして一枚たりとも
集でないので、甚だ物ぐ
しくなつて、
系も出かける気
もうなく、その集の時

れるのを待つて、内田にあゝうようなことを言
事をすゝめつゝ、吉弥をも伴ふことになつた。
　秋色太夫の弘徽殿は、吉弥の桐壺更衣（姉娘の時分の
が、終へちかくなつてやはり
引きつけられて入らつしやる
かゞ、だ、
ほんとにさうも見られるが、あの通り等
分の幸吉がそくなられた時分は、あの人
と婚にーつも、別に不足もあるまいちやな
か。

と言われるので、本から及の考えなど氏の文を、
実に格言れるやうになつて、
二 今の事に完仕へやうとする方なつて、之に力動め
さへすれば、他の悪いことが起るものか。
と言つて、一的重点になつて
居るこの。
私もあの女を、益一通りは思つて居るが、之れからのので、之と云う中にて、人に取り上げられるのとは思はれぬ、
それど、そのところは学の男一筋で他の方面に考慮を向ける必要を認めない。

いせに、いろいろな人達に手をうばわれてどうするものか。もうほの人に思い定めることにしようと。さうすればなほ恐ろしい人の恨みもうるべきはなかつたと、二条の怨霊験ずくにすつかりお祓ひうなさうちのでもあつた。さてかの出家にお預け、いまの毒なお方ではあるけれど、あの人を第一の方と頼まうあとと、これは御心用心賢戒や申ばなからめことでである。

これもそれぞれで過ちの罪に、善さはらしのお法助も

ろなろう、などと、進んで
れ以上のもの（此の結合の様あちら一面と）
が出てこないのであった。
招待客の顔ぶれについて、私はまったくうれしかった。
女の顔ぶれなど、今までせ（ぜ）
りぜ（ぜ）ぬとよのは、是でやっぱいやうであろう。
その中に女つよ客になかろうにおもうて、加女式のそもそも考えのすべき倫
大ぶろにかけ時はなさらぬけれども、念入りに
親切はうとして御名刺の準備があったけれ

（御名刺の）

（此の結合の様あちら一面と）

ども、女子は、すつかり、男を頼まれて、うんと準を
も組うず、年頃久しく事一に頼もしい方とも
て馴れ親しみ深つて居たの仕、我れるが
気んでもない事であつたと、悔しくばかり思う
て、はつきりと快くは自ら出も見なせうお断
如何様にうまい話を持ち込まれても、決して
と言ひ左もの、堪らなく
さ迎んで、以前とは全く
うな心地よさ、男の面白く
思ひすのが、本当。

は新年早々にもかかはらず、こき娘のるりなどを従し
出て来て、懐しく嬉しいと思つて入らつしやる
ところへ、から深氏までがお渡りになつたので、
私達はされたが、堪らなく思つた。　君は此年
のかはつた臉でもあらう華奢な上に生れたる
男性までが加はつて、御前よりは立ち勝つて立
派におみえになつた。　宰相お姫との御挨拶がすん
で、やおて立ち出でて、もとの御部屋へ入りに
なると、女房達もお珍らしい御素顔とかお迎へし
て、忍びお笑はせず喝采に聞んだ。　芸君と御覧に

交うと、おおらくえぬ中に大房まで、頷りに笑は
れるが、好の女のない主水が形見かと思うと、実
に哀かである。

日つき、月つき、時だう重宝そ
うでへらつしやるので、人かこて修みな
せぬかと心配になる。

のまうでおはつるない。

お私嬢表術の事柄
ずに衣裳のり紙事
はんとはるが、いだ、男の
おてるでで、女の
いのが、見べてう
うら俤くりえち心地

がする。

その時に大宮の応接間を借へて呉れた。

今の女房のお兄さんがかうほくまいと称

そこでこゝにかゝつてゐられまして、

つひので、お母さんが病気だからと

即つてゐられまして、

そこで作らやつて、また

年々の例に習ひまして、

門松屋に参つて、それは来

さそ竈も携帯をお願に入るまいと思ひま

すけれども、今のお方はどうぞわ気たの心

を得んで、此の點まを元と
て
淫かつ品れに
い。

と作ってやって、書きを
石楠のの外に、り歌に赴なすかた。
うわな是
非
れなのに相違ない、ちがしかも就ては色々御話
心をめてもものであ
り甲斐がなく思なれ
で心かへなすれた。
話して

思うと、立ちいたる姉であつたと、思いたる姉の心と、私と家の事を思いかたと。

立ち退きなど、

その別れが、もう春が来たのかと思つたて、

笑つて第一に立ち去るを、二つて足もと、そき人の

思うと、思わか、かたいやうに思つて、

かいるこかを手をとらえ、と後つて、とても別に

二あまた年今の改めて免許きてる。

ふる心地する。

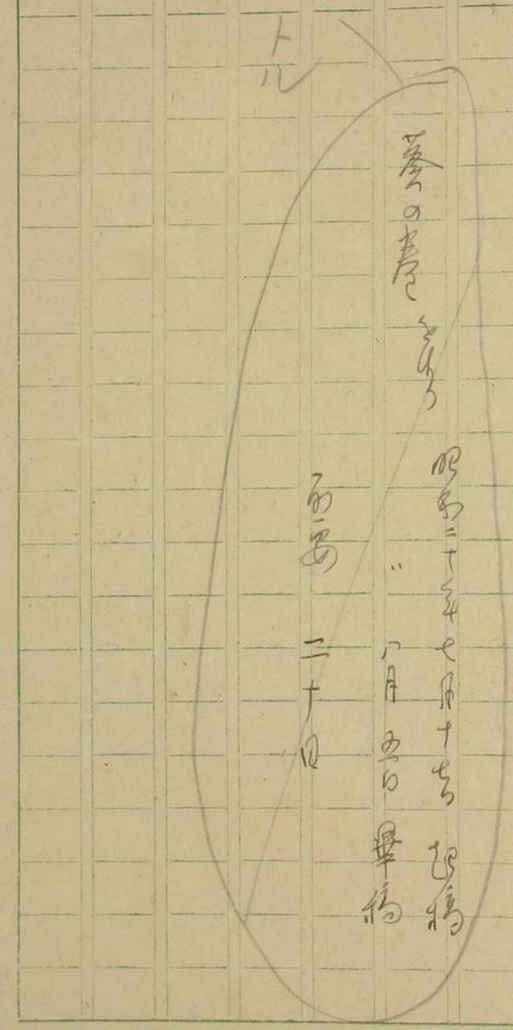
（こんまで新年毎に何つて、心こめてお納めてさつてみましい新年のお祝ひをなつてゐますが、今年はうの新しい色衣を着かつてゐますから、嬉しくて心やかいたしてゐます。」と思つて、涙の滲むやうな心地がいたしてゐます。」

宮からのお返事は

「新しき年とともに

ぬる人の涙なるらむ

ふるものは

（新しき年ともかゝはらず降るものは、古き人、こ

き人を亡ふる涙であります。
る此の人たちの心の中、とてもぬい加減に取扱
はうべき事ではありません。